LOGISTICS NIPPON

物流ニッポン

2021年（令和3年）
8 24 火

発行/火曜日・金曜日　第4405号　©物流ニッポン新聞社 2021（1969年4月1日第3種郵便物認可）　購読料6カ月35,316円（うち消費税2,616円、軽減税率8%）
株式会社 物流ニッポン新聞社　編集発行人：山田　晋　東京都千代田区平河町1-7-20　TEL03-3221-2345　URL=http://www.logistics.co.jp

倉庫ドクターが語る「物流施設のツボ」⑥

イーソーコ総合研究所
社長　出村　亜希子

変化するオフィス空間

空間構成にメリハリ　働き方「多様化」対応

倉庫をオフィスにリノベーションする手法が定着してきましたが、昨今は内容が大きく変化してきています。倉庫転用のオフィスと言えば、従来は倉庫の大空間を生かしたゾーニングが多くを占めていましたが、最近では、「コミュニケーションを取りやすく、広くてつながりのある大空間」を中心に、「会議やミーティングに使える小規模な閉じた空間」を複数設けるなど、全体的にメリハリのある空間構成が増えています。

中には自習室のように集中して作業できる「こもり空間」や、1対1ミーティングのための狭小ルーム、ソファやリクライニングチェア、バーカウンターなどを配した多種多様なリフレッシュスペースを併設したオフィスも増えています。

通常の執務もフリーアドレスデスクで、仕事の内容やその時の気分などによって場所を選ぶことができます。居心地の良い場所を見つけて働くことができるようになり、業務効率の向上にも期待が寄せられているようです。

ハードだけではありません。ソフト面の取り組みも興味深いものです。特に注目しているのが、ファミリーオフィスの傾向です。

ファミリーオフィスとは、従業員同士が和気あいあいと家族のような雰囲気で働けるオフィスを指します。長時間を過ごすオフィスを、擬似的な住まいと捉える概念です。福利厚生として、食事を提供するオフィスが増えているのもその一環と言えるでしょう。

社内の厨房でシェフがレストランばりの料理を作ってくれて、社員皆で家族のように食事を共にする。夜にオフィス内のバーカウンターで社員交流会を行っているところまであります。IT（情報技術）の進歩でどこでも働けるようになったからこそ、人と人とのつながりを大切にしようという考えです。

また、フレックスタイム制の導入により、オフィスを24時間稼働させている企業も見受けられるようになってきました。ポイントとなるのは、仮眠スペースとシャワースペース。おしゃれなカプセルベッドやリクライニングチェアを配して、様々な働き方に対応します。コンパクトで合理的な空間活用ですが、運用をしっかりすることが重要になってきます。

働き方改革関連法が施行され、多くの企業が働き方改革に取り組んでいますが、こうした要素はイーソーコ総合研究所本社事務所でも取り入れています。

2019年7月から業務を開始しているオフィスは、港区湾岸、若手クリエーターやスタートアップの集積地として注目されはじめたエリアに立つ昭和61年竣工の管理物件です。倉庫事務所ビルの7階で、駅からは少し離れますが、3面に連なる連続窓からは運河の向こうに品川・台場エリアを望みます。

普段働くオフィスの床は原状のスケルトンにクリア塗装のみとして費用を節約しました。湾岸倉庫のプリミティブな雰囲気もさることながら、「思ったよりオフィスチェアのキャスターの動きが良い」「足音が心地良い」など、モルタル床の特徴をあらためて実感しているところです。

部署ごとのゾーニングはパーティションなどで仕切らず、什器（じゅうき）やカーテンなどを利用して緩やかにつなげました。什器も以前からそれぞれの部署で使っていたものを運び込んでいます。統一感には欠けるかも知れませんが、かえって空間に豊かなバリエーションを加えているようです。

知恵を絞って自分たちでつくった執務室とは異なり、来客スペースは費用を集中させて「劇場」をコンセプトとしたおもてなしの空間をつくり上げました。エントランスから続くレッドカーペットを進むと、重厚な扉がお客さまをお出迎えするという趣向です。建築や建物管理、リノベーション、そして、働き方に対する私たちの想（おも）いを感じてもらえるオフィスとしました。

昨今の働き方は従来のように画一的ではなく、フレックスタイム制やテレワークなど、多様なスタイルを選択できるようになりつつあります。それに合わせて、オフィスの在り方も変わってきているのを実感しています。

この先、どんなオフィスが出てくるのか、期待するとともに、それを提供する立場としての役割の大きさを改めてかみしめています。